

十二支館



十二支館

村上元三

新潮社版

十二支館

昭和三十八年一月二十六日 印刷
昭和三十八年一月三十日 発行

定価 二九〇円

著 者 村 上 元 三

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(四)七一―一―九
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお
取り替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社

製本・神田加藤製本所

© by G. Murakami

目次

十二支館……………五

藥師如来……………二八

比翼塚……………三〇五

裝
幀
風
間
完

十二支館

十二支館

雪の夜の客

一

御披露申し上げ候。

私儀、これまで相生町二丁目にて旅館渡世まかり在り候ところ、本年三月の出火にて類焼仕り、その後、再び開業の機を待ち居り候うち、この度、本町通五丁目へ引き移り、西洋式ホテルを開業致す事と相成候。万事、欧米の例に倣い、御料理の儀は、横浜在留仏人ボナン氏の許にて修業仕り候コック利藏を長として、ごく風味專一に仕り、座敷はもちろん、諸道具に至るまで美を尽し、精々下直に努むべく候。なお、高島嘉右衛門先生のお勧めにて、全店、瓦斯燈を使用仕り候ゆえ、欧米

諸國の旅館といささかも変ることなく候間、お引き立ての程、ひとえに願ひ上げ奉り候。

本町通二十五番

ホテル十二支館

大沢 鶴五郎

二

横浜毎日新聞に、開店披露の広告を出したのが、明治六年十月末のことだから、その年が押し詰ったところ、いくら東京よりも文明開化の度が高い、といわれている横浜でも、そうそう新しいものの好きの客が多いわけではなく、十二部屋あるホテル十二支館は、七間が空部屋になっていた。

十日ほど前から、雪が降りはじめ、一向に風も雪も衰えそうもないので、横浜入港予定の外国船は、ほとんどが神戸港へ入ってしまったし、横浜品川間を走る一日六回の汽車も四回に減っている有様であった。

ことし創立したばかりの横浜生糸改あらため会社も、荷が入って来ないので困っているし、蚕種検査所の建物も、雪の重

さで急ごしらえの屋根が壊れてしまったという。

外は美しい雪景色なのだが、その晩、世の中の不景気が全部、自分ひとりの身へ降りかかったような味気ない気持ちで、大沢鶴五郎は、ぼんやりと帳場の椅子に腰を下ろし、窓硝子の外に降りしきる雪を眺めていた。

木造ながら新築なので、このホテル十二支館の入口の扉をあけて入ってきた客は、いまの横浜にはちょっと見られない洋式の装飾と、天井から下った明るい瓦斯燈の光に目がくらんだようになって、ホテルのまん中で立ちどまってしまう。

外国人の客は、まだ旧幕のころの匂いがどこにも残っているこの横浜に、こういう洋式の新しいホテルが出来ているのが、相当に意外な気持ちになるらしく、日本人の客は、まだ丁寧^{ちやんげん}を結った男たちの歩いている街路から一步入っただけで、別天地へ飛び込んだような感じを受ける。

入口の扉は、双方へ開く幅の広い、硝子張りのもので、ホールの広さは十坪ほどある。正面に洋式の帳場があって、店主の大沢鶴五郎をはじめ使用人たちは、ここをカウンターと呼んでいる。木製の長い台のうしろに、鶴五郎か、あるいは支配人の仙右衛門が、いつも交代に腰を下ろして

いて、客の応接をする。

椅子の背後には棚があって、宿泊人の名簿を置き、十二の部屋ごとに分けた棚の中には、それぞれ鍵が納めてあった。

ホールの壁には、泰西名画を模写した額が四枚ほど飾ってあるが、ほかのホテルのように日本風な飾りつけは何も見当らない。

カウンターの横に階段があって、二階は六つずつの客間が、廊下をはさんで並んでいる。

食堂は階下で、やはりカウンターの前を通らないと出入りが出来ない。

大沢鶴五郎が、祖父の代から三代も続いた旅籠屋稼業を、類焼を機会に思い切ってホテル経営に改めたのは、ヴァン・ビューレンと相談をした結果であった。

横浜での最初のホテル、というよりも、日本で一ばん先に開業をしたホテルは、明治二年、海岸五番の居留地で営業をはじめたクラブ・ホテルで、館主はイギリス人のヴァン・ビューレンと言った。

古い旅籠宿の若主人でありながら、伊勢山下の高島学校へ入り、洋学を学んで、山手のダヌ・ド・サンモール学

校の教師となり、日曜学校の先生になろうという女生徒たちに英語を教えていた、という変り者の鶴五郎だから、ヴァン・ビューレンは、ホテルを開業するのなら、すべての点を洋式にしたほうがいい、と勧めた。

来年で二十八歳になる鶴五郎は、英語が流暢な一方、これも変り者で、旅籠の主人のくせに漢字塾を開いていた亡父の鶴吉譲りの旧弊なところがまだ残っていて、屋号は祖父のころのままの十二支屋というのを使いたい、とヴァン・ビューレンへ言い張った。

子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、と十二の時日に分けた暦法などに関心のないヴァン・ビューレンは、初めのうちは反対をしたが、それぞれ十二支が英語でも呼べる、とわかると、かえって日本の古い習慣を洋式のホテルの室名につけるのは面白い、という風に気が変わってきた。

ただヴァン・ビューレンの心配したのは、開業当時の部屋の数に十二でもいいが、将来、商売が繁昌をし、部屋の数も増すようになったらどうする、ということであった。

ちゃんと鶴五郎は、先のことまで考えていた。増築をするようになれば、うしろのほうに新しい建物が

建てられるよう、もう敷地も買い求めてあるし、部屋の名も子の一番から何番、という風に十二を単位にして増やして行く計画であった。

ホテル十二支館の二階にある客間は、ペンキを塗った入口の扉のところに、漢字の卯という字を朱で彫ってあるほか、その下に鬼を白く浮き彫りにし、下にラビット、と英語でこれも彫りつけてある。

こういう趣向は、それぞれほかの十一の部屋も同様で、たとえば辰の間は赤い竜の彫刻と、ドラゴンという英語が扉に彫りつけてあるし、部屋の中の飾りつけも室名に準じてあった。

どの部屋も六坪ずつで、片隅に洋式の寝台、それから椅子と卓子、横に扉が二つについて、一つは便所、一つは浴室になっているが、その浴室だけは木造の、流し場がついているという日本風の物であった。

ヴァン・ビューレンは、浴室も便所も、自分のクラブ・ホテルと同様、洋式にしたほうがいい、と勧めたが、やはりそこまでにする決心は、まだ鶴五郎にもなかった。

室料は、西洋人が一円、日本人が八十銭、という風に等級を定めたのは、客の扱い方も異なる、というわけではな

く、外国人の客が泊る場合は特別に英語の出来るボーイをつけるからであり、チップ以外に、差額の二十銭は通訳料、という鶴五郎の考え方であった。

これも西洋風に、部屋世話をする女中というのは一人も置かず、ボーイが六人、食堂の給仕が三人、少年が四人、コックが利蔵以下三人という配置で、ただ掃除をさせるのに四人の女中を備い入れてあった。

ところで、主人の大沢鶴五郎が、ぼんやりとカウンターのところから窓の外を眺めていた晩、このホテル十二支館には、五人の客しか泊っていなかった。

卯の間には、九州のほうの訛りのある、色の黒い、紋付に袴という、八の字髭を生やした客がいて、宿帳には、佐賀県人、士族、佐伯幸之助、四十二歳、と達筆で書いてあった。

丑の間の客は、アメリカから生糸の買付けにきた商人で、サン・フランシスコ、ポルトラ街、ヘンリー・マクドウエル、三十四歳と宿帳には書いてあるが、今朝から外へ出て行ったり、まだ帰って来ない。これで三日、このホテルに泊っているが、毎晩、谷戸坂上にあるチョップ・ハウスあたりへ行行って遊んで来るらしく、酔っ払って帰ってくる。

寅の間に泊っているのは、大阪難波通二番地、無職、尾瀬円次郎、五十六歳、と宿帳に書いた客だが、素姓はわからない。髪の毛は真白で、品のいい、ちょっと見ると老實婦人といったような感じの顔つきで、それが派手な格子縞の洋服を着て、赤い縞の入ったネクタイをしめていた。相当に金を持っているらしく、十日分の部屋代を前払いしたが、朝、昼、晩、食堂に下りて来るだけで、ここに泊って六日目になるのに、まだ一度も外へ出たことはない。

酉の間に泊っているのは、名はハンス・ヤンセン、ハンブルグに住む技師だという四十六歳になるドイツ人で、ときどき神奈川県庁へ出かけて行くようだが、どういう技師なのか、はつきりしたことはわからない。よく肥った男で、日本の酒が大好きだというし、昼と晩、二人前ずつの洋食を平らげる。

戌の間には、ひどく風采のあがらない、栃木県塩原温泉宿の主人だという、三十三になる男が泊っていて、笠原繁三郎、と宿帳に書いた。昔ながらの古い営業のやり方を続けている自分の温泉宿に新しい方針を採り入れたいと思い、横浜へ見学に来た、と話していたが、これで三日、横浜の空気を吸うよりも、吉原廓で遊ぶほうが面白いらし

く、今晚も部屋には居ない。

客は五人とも、部屋代の踏み倒しなどする心配は無さそうなので、その点は店主の鶴五郎も安心していられるが、七つも空部屋があるのでは、この年の暮は毎月一燈金四円四十四銭という高価な瓦斯料金を瓦斯会社へ支払えるかどうか、という有様であった。

江戸の生れだが、横浜開港後、横浜で建築請負をはじめ、明治三年に政府の京浜間鉄道敷設計画の実施のとき、横浜石崎から神奈川権現山下へかけて海面、数万坪の埋立てをやった高島嘉右衛門は、現在では高島学校の校長でもあり、航海業、瓦斯燈事業なども行っているし、大沢鶴五郎にとつては恩師でもあった。

設立費二十万円の高島嘉右衛門の瓦斯会社に、鶴五郎も一万円を出資したし、ホテル十二支館を新築した費用も五万円を越え、親類の両替商から借りた金の利息だけでも年の暮には払わなくてはならない。

まだ独身で、相当に女遊びは好きだが、といって女のことで馬鹿な金を使うことの嫌いな鶴五郎は、顔馴染の関内芸者から、評判の悪い反面、ひどく女に好かれるときもあった。

母親のお時や妹のお末たち家族は、相生町の店が焼けたあと、前田橋を渡った元町三丁目に、家を一軒借りて住んでいる。

祖父の代から続いている旅籠宿の十二支館を、こういう洋式のホテルで再開業するのは、母親も親類たちも反対だったのだから、すべては鶴五郎一人が責任を負わなくてはならない。

さて、開業早々のこのホテル十二支館がどうやって年の瀬を切り抜けるか、と降る雪を眺めながら、ぼんやり鶴五郎が考え込んでいたとき、雪と風と一緒に入口の扉が開き、一人の男が入ってきた。

三

「いらっしゃいまし」

もう長い間の習慣になっているので、憂鬱な顔つきをしていたのが、まるで一瞬のうちに面をつけ替えたのと同様になり、大沢鶴五郎は顔一面に愛想笑いを浮かべた。

しかし、悪いお天気でございます、と続けようとした次の言葉が、鶴五郎の咽喉のところで引こかかったようになつてしまった。

頭から全身に雪を浴び、のそつとホールの中央に突立つているのは、まわりの壁にかけた泰西名画の模写、剝製の鹿の角、天井から下った瓦斯燈のシャンデリヤなどとは釣合いの全くとれない、侍が両刀を腰から外したままの姿であった。

総髪を束ねて、うしろへ下げ、黒紋付の羽織に光った着物、仙台平の袴、白足袋に高足駄、という身なりで、着ているものが上等なのは、商売柄、一目で鶴五郎には見分けた。

年のころは三十を少し越したぐらいであろう。色の白い、眉の濃い、立派な顔立ちだが、眼つきは沈んでいて、ひやりとしたものを感じさせる。

雨合羽とか雨傘とか、雪を避ける用意は何もしていないらしく、そういう姿のままで雪の中を、ふらりとこのホテルへ入ってきたような塩梅であった。

客ではないな、と思ったので鶴五郎は、カウンターからホールのほうへ出て行きながら、

「何かご用でも」

そう訊いた声が少しとげとげしくなっていたのは、こういう不景氣な晩、おそらく道に迷ったに違いない侍の亡者

みたいな男を相手に、少しでも時間をつぶされるのは業腹、という氣持が先に立ったからであった。

「ここはホテルでございますが」

「わかつてるよ。だから入って来たんだ」

男は、風采には似合わない、齒切れのいい巻舌で、

「部屋は空いているかえ。五日ほど泊めて貰いてえ。金は前に払っとくから心配は要らねえぜ」

こういう洋式のホテルへ入って来たからといって、少しも戸惑ってはいず、落着いた物腰であった。

ほっとして鶴五郎は、もとの愛想笑いを浮かべた顔に戻った。

「どうも失礼を致しました。ようこそお越しで、有難う存じます。はいはい、部屋は空いております。一泊八十錢、食事の料金は、そのたびに頂くことになっております」

「表の掲示に、そう出ていたから、おいらも安心して入って来たんだ。宿帳をつけようか」

カウンターへ自分から近づいて行った態度が、いかにもこういうホテルに慣れている素振りであった。

「ご面倒でございますが、お願いを致します。近ごろは何かと、官のほうも嚴重でございますな」

棚から宿帳を取り出しながら、鶴五郎がそう言ったのは、相手を見て部屋代の踏み倒しをされる心配などはない、と見てとったのと、一つには、胡散臭い客だったら、官という一言で相手から反応が感じられる、という長年の経験から割り出したことであつた。

だが、その客は平然とした顔つきで、カウンターのの上に置かれた宿帳をひろげた。

その宿帳は、普通の旅館にある和綴の無粋なものではなく、鶴五郎が特別にあつらえ、ヴァン・ビューレンと相談して、厚手の西洋紙に草表紙をつけた、贅沢な大きな帳面であつた。

「開業早々のホテルというなあ気分がいいね。宿帳まで新しい」

客は、鶴五郎の手からペンを受取り、インキに浸すと、おそろしい早さで、達筆に書いた。

東京麹町三番町六号、土族、亀井栄介、三十三歳、という字が、毛筆だけではなく、ペンも扱い慣れている手跡であつた。

「ご職業は」

と訊いた鶴五郎へ、その亀井栄介という土族は、

「無職さ。ご一新の瓦解で、江戸の旗本たちは大い貧乏になつてしまつたが、おいらの親父が金儲けの名人だったのでね。上様に従つて静岡へ行かずとも済み、ぶらぶら暮しているのよ」

「それは結構なご身分でございますな」

そう言いながら鶴五郎は、亀井栄介の介の字が、普通の身分ではつけられない字だということも知つていたし、見かけよりも太い頑丈な栄介の手の指に、竹刀だ、このあるのを、ちゃんと見届けていた。

「今日は富貴楼へ遊びに来たところ、帰りの汽車が無くなつてしまつたし、しばらく横浜で遊んで行こうと思つてね」

まるで他人の事のように、ひとり言を言いながら亀井栄介は、宿帳をひろげて一枚ずつ大して興味も無さそうに眼を通していた。

「おいらを入れて、客は六人か。開業そうそうのところで、あんまり景気はよくねえと見えるな」

「おそれ入ります。でも、わたくしのところは、めつたなお客様はお泊め致しませんから」

「泊めて貰えるところを見ると、おいらはおめが、ねに叶つたというわけか」

「ご冗談を」

「この卵の間にいる佐賀県人の佐伯幸之助というのは、長逗留かえ」

「これで三日、お泊りでございます」

「今夜は」

「部屋においてでございますが」

そこまで言うてから、鶴五郎は相手を警戒する気持になり、口をつぐんでしまった。

亀井栄介も、それ以上は訊こうとはせず、内ぶところから印伝革の立派な紙入れを出し、一円紙幣を五枚、無造作に抜き出して、カウンターの上に置いた。

「宿料五日分のほか、チップというやつを置いとくぜ」

「有難うございます」

鶴五郎は、栄介の紙入れの中に、部厚い紙幣の束がぎっしりと詰っているのを、ちらりと見届けておいた。

「酒も飲んだし、飯も食ってきたから、もう何も要らねえ。下着のようなものは、富貴楼のお倉から届けて貰う。今夜は何もかまわねえでくれ」

「はいはい、只今ご案内を」

と鶴五郎は、カウンターの横手の、ちょっと凹みになっ

ているところへ声をかけた。

「お客様を、辰の間へご案内を」

「はい」

瓦斯燈の光の届かないその薄暗いところから、青い詰襟に鼠のスボンという服装の、ボーイの健市が出てきて、ていねいに栄介へ頭を下げ、足音を忍ばせるようにして先に階段を上って行った。

そのあとから、あいだをへだてて二階へ上って行く栄介のうしろ姿は、左肩を上げ、数年前まで刀を腰にさしつけた身体の癖が、そのまま残っていた。

「おやすみなさいまし」

栄介の後姿へお辞儀をし、声をかけた鶴五郎のそばへ、そっと食堂を出てきた支配人の仙右衛門が近づいた。

ひろげたままになっている宿帳をのぞき込んで、仙右衛門は声をひそめた。

「いまのお客は、なんでございます」

「ご直参で、金と暇を持て余しているお人のように見えるが」

「富貴楼のお倉さんだいぶ心安そうな口ぶりでございましたから、心配はございますまい」